

脳梗塞

木更津東邦病院 放射線科 高瀬 奉博

症例 1

76 歳、男性、意識障害。

症例 1 - 1

所見：左右の解剖は、対照的。

明らかな HDA、LDA 無し。

midline shift 無し。

症例 1 - 2

所見：右前頭葉に広範囲な LDA 有り。

右のシルビウス裂は浮腫により一部消失。
右前大脳動脈領域と右中大脳動脈領域の
梗塞と考える。

梗塞巣の density が側脳室に比べ high な
ので新しい梗塞と考える。

広範囲なので脳塞栓症による心原性脳塞
栓ではないかと考えられる。

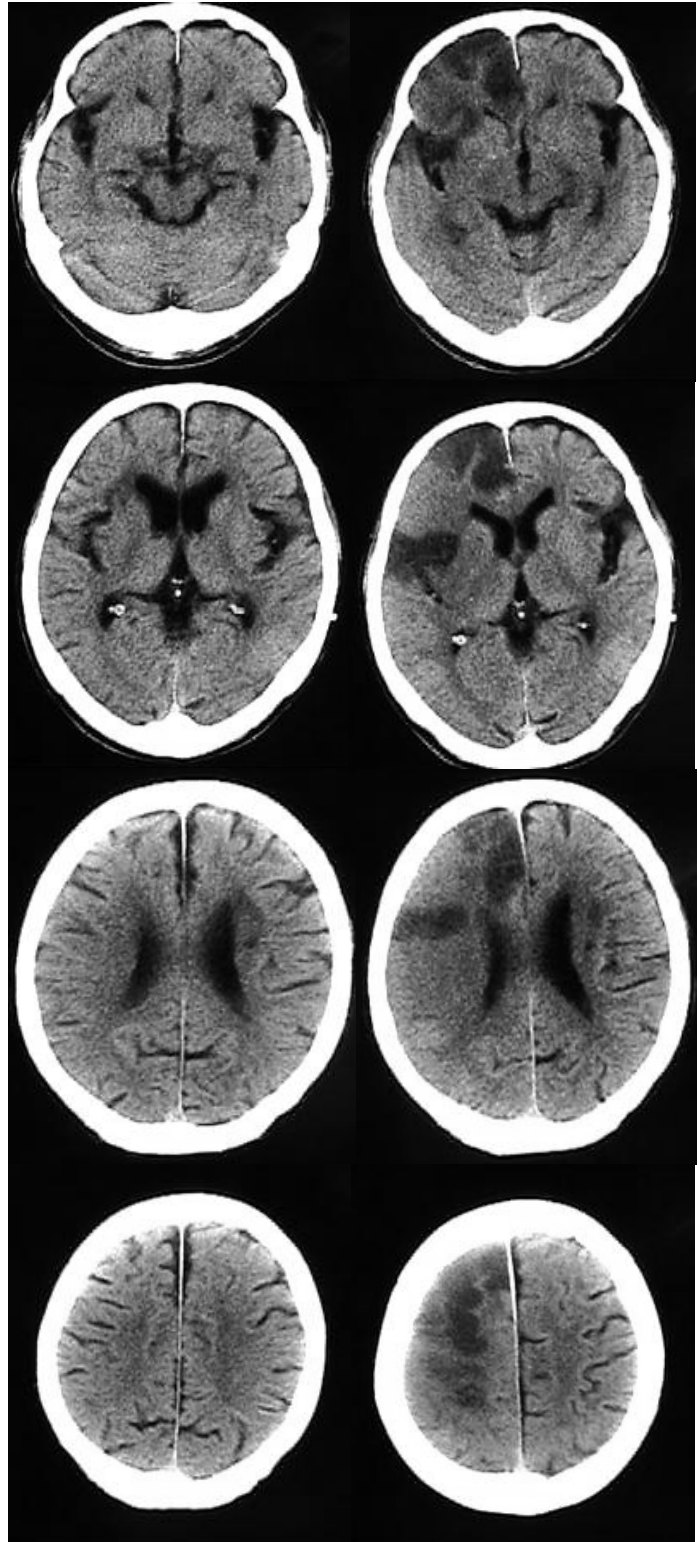
心原性脳梗塞と考えると出血性脳梗塞へ
移行する可能性有り。

脳浮腫による脳ヘルニアの可能性有り。

ポイント

病態の経時的変化を知ること。

そのことから follow up の重要性を理解。



症例 1 - 1 (発症直後)

症例 1 - 2 (二日後)

症例2

12歳、女性、頭痛。

症例2-1

所見：右側脳室前角と右の尾状核の間に軽度の density 上昇有り。

右側脳室体部は何かを押されて一部消失。浮腫性変化は乏しい。midline shift も無し。

不均一な HDA、LDA が混在し、浮腫性変化が乏しいことから血管性病変を考える。

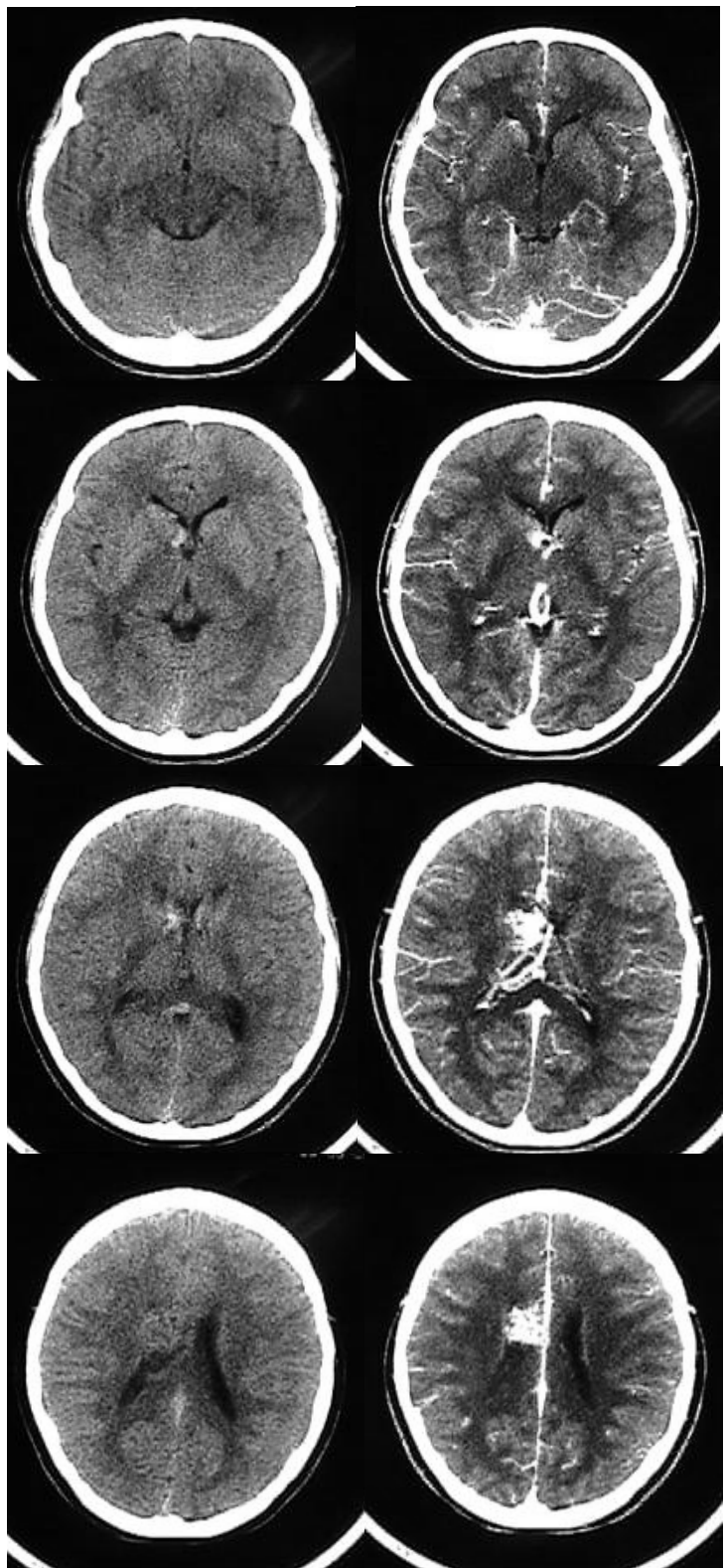
症例2-2

所見：造影したことによって血管が絡み合うように蛇行している様がよくわかる。AVM(脳動静脈奇形)を考える。

静脈洞に造影剤が入ってきていることから血管性病変を考慮してゆっくり撮影したことがわかる。

ポイント

- ・脳梗塞との識別。
識別のための造影剤使用の有用性。
- ・造影タイミングを考慮した撮影の重要性。



2-1 (CT 単純画像)

2-2 (CT 造影画像)

症例3

症例3-1

それぞれ側脳室、皮質、白質を比較してみると同じように見える。

脳溝、シルビウス裂を見てみると若い方は、脳溝の深い部分が開いているのに対して、年をとるにつれて脳表側の末梢が開いてきている。一般的な70歳代のものを見ると、そのことがよくわかる（図H）。

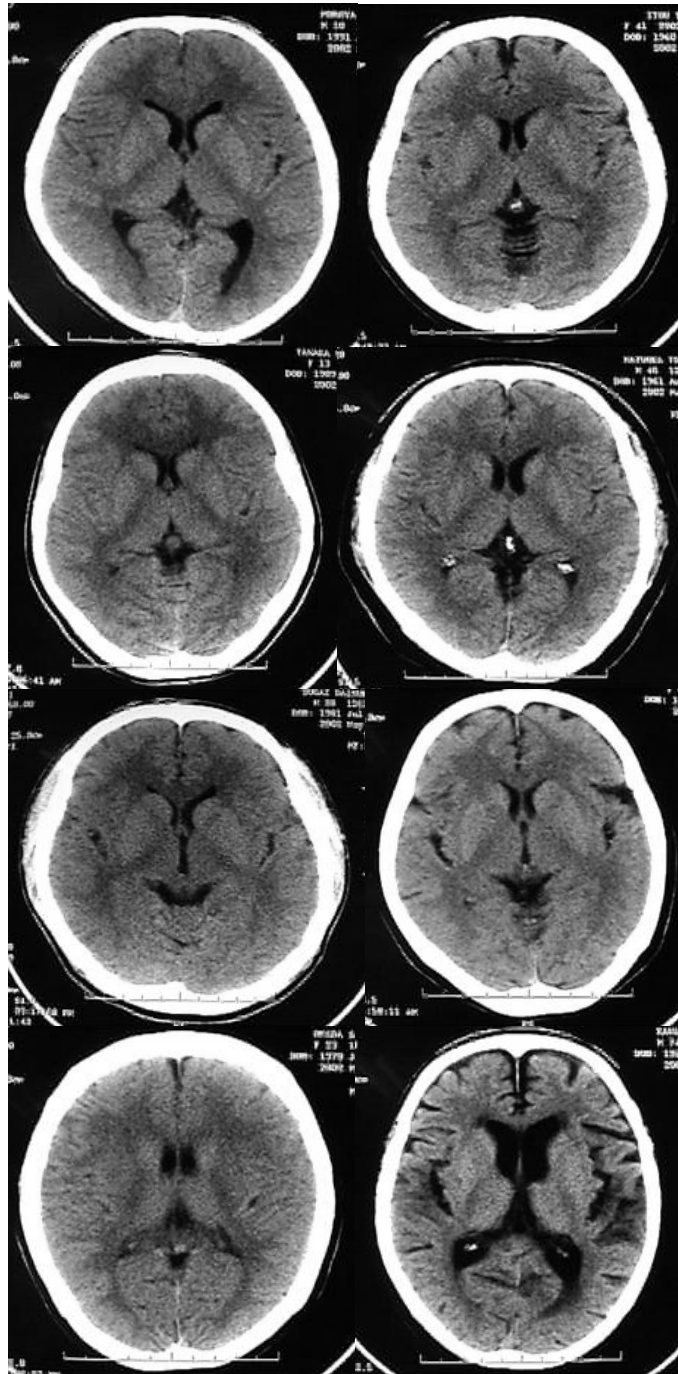
側脳室が拡大しているなどの形状の変化だけでは、年齢を判断するのは難しいといえる。

ポイント

病気を探すのではなく、正常解剖を理解したうえで、脳溝、脳漕、脳室、脳実質等、全体に目を向けることの重要性。

頭部CT画像でのポイントとして

1. 左右対称であるか？
2. 浮腫性変化に伴い脳溝、脳室がふさがってないか？
3. なんらかの圧迫所見によって midline shift がないか？
4. 症例による造影剤の必要性。症例によって造影タイミングを考慮した撮影。



A. 10 歳男性	E. 41 歳女性
B. 13 歳女性	F. 40 歳男性
C. 20 歳男性	G. 69 歳女性
D. 23 歳女性	H. 74 歳男性